

ハトムギにおけるアワノメイガの  
発生消長と殺虫剤の防除適期

富山県新川農林振興センター <sup>むか</sup>向 <sup>い</sup>井 <sup>たまき</sup>環\*

富山県富山農林振興センター <sup>ち</sup>千 <sup>しま</sup>嶋 <sup>こう</sup>宏 <sup>へい</sup>平\*

## はじめに

富山県は、水田転換畑における土地利用型作物の一つとしてハトムギが栽培されており、2024年の作付面積は250 haで全国1位となっている（富山県ハトムギ生産振興協議会調べ）。耐湿性に優れる点や、ダイズの作業機等を活用して機械化が図れることから、2008年ごろより普及が進んできたが、作付け回数の増加に伴いアワノメイガの被害が顕著となり問題となっている。

アワノメイガ *Ostrinia furnacalis*（チョウ目：ツトガ科）はトウモロコシなどの害虫として知られているが、ハトムギでは出射・坪井（1981）により詳細な報告がある。アワノメイガはハトムギの茎に幼虫が穿孔食入し、芯枯れ（図-1）や折損を生じさせ減収させる。一方、ハトムギはマイナー作物であるため、登録農薬が少なく、



図-1 アワノメイガによるハトムギの芯枯れ被害

Seasonal Occurrence of *Ostrinia furnacalis* and Optimal Timing of Application of Insecticide against Its Larvae in Coix Seed. By Tamaki MUKAI and Kohei CHISHIMA

（キーワード：アワノメイガ、ハトムギ、発生消長、防除適期）

\*元：富山県農林水産総合技術センター 農業研究所

現地では薬剤を散布しても被害が収まらない場合が多い。そこで、本研究ではハトムギの被害の抑制に向けて本種の発生消長や防除適期について検討を行った。

## I アワノメイガの発生消長と芯枯れ被害の推移

本県のハトムギは主に5月下旬ごろから6月上旬にかけて直播きで播種され、収穫は9月下旬から10月中旬ごろに行われる。そこで本作型でのアワノメイガの発生消長を明らかにするため、2021、22年に富山県農林水産総合技術センター 農業研究所内のハトムギ圃場にフェロモントラップを設置し、同一圃場で2か年の雄成虫の発生消長を調査した。なお、品種は本県で主に作付けされている「あきしずく」を用いた。

フェロモントラップによる調査は、吉沢（2004）の報告を参考にファネルトラップを用い、フェロモンルアーは1か月ごとに交換し、おおむね1週間ごとに誘殺された個体を回収し計数した。トラップは、実際にハトムギが作付けされている周辺から2m内側に入った場所に、ルアー位置が畝上1mとなるように設置した。播種は両年ともに5月26日に行い、トラップを2021年は6月1日～10月14日まで、2022年は4月1日～10月31日まで設置し、播種までは圃場の畦畔に設置した。また、同一圃場内に芯枯れ被害調査を行う2m間の定点を2021年は4箇所、2022年は3箇所設置し調査した。

2021年は、越冬世代と思われる雄成虫が設置直後から大量に誘殺され、その後6月下旬から7月上旬にかけて減少傾向となり、再び7月下旬に第1世代成虫と思われる小さなピークが見られた。8月に入るといったん減少したが、下旬ごろから再び増加し、9月上旬に第2世代成虫と思われるピークが見られた。アワノメイガの芯枯れ被害は7月下旬から確認され、8月に入ると急激に増加した（図-2A）。

2022年は播種前からトラップを設置したところ、5月上旬から誘殺が始まり5月下旬に越冬世代と思われるピークが見られた。7月中旬には第1世代成虫と思われ